

PHD LETTER

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD LETTER
Volume
133
2016.12

公益財団法人PHD協会
2016年度会報133号

ミャンマーで出会ったスラムの子どもたち

ミャンマーのスラム「パター」での
出会いから研修事業の成果を考える

PHD Movement vol.16 P1-2

「ここが私の職場」

13歳の女の子、ミテさん。

毎日ここで父と働く。学校には行けない。

その背景には都市の貧困が横たわる。

PHD協会に何ができるだろうか、考えてみたい。

PHD LETTER 133号 目次

- ・ PHD Movement P.1-2
- ・ 2016 SUMMER PHD STUDY TOUR P.3-4
- ・ REPORT インドネシア・西スマトラ州
タランバブング地域の保健医療の状況 P.5
- ・ 2016年度研修生レポート P.6-8
- ・ ネパール大地震復興状況の報告 P.9-10
- ・ 「農こそが苦難にくじけない生きる力を育てる場」追悼 大森昌也氏 P.11
- ・ 3週間のインドネシア・スマトラ 日本語教師体験 P.12
- ・ 日々是東奔西走 P.12
- ・ Iduladha イドゥルアドゥハ（犠牲祭） P.13
- ・ バランスのジェンダー観 P.13
- ・ PHD活動紹介 2016年7月～10月 P.14
- ・ PHD News P.15



ミャンマー中部の都市マンダレーにあるスラム「パター」。通りでは子どもたちが元気に走り回っていた。



左/スラム「パター」の道路。訪問した8月は雨季だったが、雨が多いわけでは無かった。しかし、写真の通り冠水している。
右/ゴミ回収業に従事する子どもたち。スラムの生活は貧しく厳しいものだが、そこに暮らす子どもたちは屈託無い笑顔を私たちに見せてくれる。

PHD Movement vol.16

ミャンマーのスラム「パター」での出会いから研修事業の成果を考える

事務局長 坂西卓郎 = 文
～分かち合い実践録～

アウトプットとアウトカム

今年の夏も3ヶ国を訪問し、元研修生たちのがんばりに触れてきた。そこで本稿では研修事業の「アウトプット」と「アウトカム」について考えてみたい。この表現は業界用語だろうか。日本語にすると下記のようになるらしい。

アウトプット = 「出力結果」

アウトカム = 「出力結果を元にして

獲得した成果・効果」

PHD協会の研修事業で考えるとアウトプットは「日本で現地の役に立つ質の高い研修を行う」ということになるだろう。課題はあるが研修事業は多くの指導者、ボランティアの皆さんに支えていただき充実した研修を30年以上に渡り実施してきている。ではアウトカムはなんだろうか？

「親に学校を辞めて、
働いてくれと言われた」

上記を考えるために舞台をマンダレーに移したい。今年、元研修生トゥン

トゥンさんの活動に参加させてもらった。そこはマンダレーにあるスラムだった。

スラムパター、元々は大きな池であった地域にゴミが集まり、仕事が発生し形成された地域で、今では3,000軒以上あるらしい。住環境はお世辞にも良いとは言えず、その割には高額な家賃を払っていたが、そもそもが不法滞在であり、当然家賃も不法なものであるようだ。

私たちは初日に動物園でのセミナーに参加し、後日子ども達の地域と家に訪問させてもらった。道中、子ども達が付きっきりで案内してくれ、話も聞かせてもらった。子ども達は8～14歳ぐらい。皆、学校を途中で退学し、仕事をしていた。その職種は主にゴミ拾い、ゴミの運搬、工事現場での肉体労働などだった。「学校は行きたかったが、親に辞めて働いてくれと言われた」という子が何人も居た。動物園に来ているせいか、服装を見ると女の子も男の子もきれいな服を着ている。聞くと「ローンで。1週間200チャット(約20円)払っている」と言う。数百円の服をローンで買う、もちろん日本とは貨幣価値

が違うが、子ども達の現状を垣間見た気がした。

動物園では昼食を一緒に食べた後、午後の園内見学の際に子ども達が「一緒に行こう」と誘ってくれた。日本人参加者は手を組まれたり、繋がれたりして大人気であった。特に私たちが何かを買って与えた訳ではない。それどころか子ども達がなけなしのお金でジュースやお菓子を私たちのために買ってくれさせた。その人懐っこさは今まで接してきたミャンマーの子ども達とは少し違う印象を受ける。ミャンマーの子ども達は奥ゆかしいという少し恥ずかしがり屋で外国人である私たちに興味津々でもいきなり手をつないでくれる子たちは少ない。それに比べ、パターの子供達は傾向としてはフィリピンの子供達のような人なつこさだと同行の今里とも話していた。

なぜこのような違いが生まれるのだろうか？ここからは推測だが、スラムの子ども達は生活環境が厳しく、近くの大人たちにまともに相手をしてもらっていない、というケースが多にしている。だから子ども達は別に経済的な援助を求めずともなく、スキンシップを求めてくる。

ともあれ、スラムの現状には日本からの参加者も驚いたが、同行してくれたモーママさん、サンティダさんも大きな衝撃を受けたようだった。曰く「村の子ども達と全然違う。可哀想。何か手伝いたい」とのことだった。

アウトカムとは 「コントロールできないもの」？

ここから今回のスラムパターはPHD研修とどのような関係があるのか考えてみたい。

既述の通りPHD研修のアウトプットは「質の高い研修の実施」であり、毎年の事業報告書に表現されている。そこに近年PCM*の問題関係図と行動計画が書き込まれた。帰国後の短期(半年～1年)の行動計画もアウトプットとして認識するようになった。2015年度で言えばサンティダさんの図書館である。計画を一緒に作り、その資金も基本PHDから支給している。よって、アウトプットはある程度「コントロールのきく成果」と表現しても良いだろう。

一方、アウトカムとはなんだろうか。冒頭で整理した表現に加え今里は「自分たちではコントロールできないもの」とも表現した。なかなか言い得て妙である。では、PHD研修のアウトカムとはなんだろうか。ここでは「研修生が地域のために具体的な成果をあげる、もしくはより困っている人たちのためにがんばる」と仮定してみたい。ミャン

マーの例で言えばNGOを立ち上げHIV患者の支援、児童労働の子ども達のケアに動いたトゥントゥンさんの例、インドネシアでは地域のために水道、電気、保育園などを作ったタベの研修生が頭に浮かぶ。ここまで大きな話にしなくてもサンティダさんの図書館の例でも「図書館を作る」ことがアウトプットで、アウトカムは「子ども達が知識を得る」、「本に親しむ」究極的には「政府の暴走をとめられるぐらい自分の考えをしっかりと持つ」というコントロールできない領域となるだろうか。ただアウトプットとアウトカムは設定次第でその境界線は前後する。

ともあれ「良い研修の実施」→「社会課題の解決」という流れがアウトプットとアウトカムの関係性であることは間違いない。今回のケースでは、モーママさん達が日本での研修でソーシャルワーカーとして育成され、「困っている人たちのために頑張る」という想いを持っていたところにスラムでの出会いがあった。子ども達の課題の一つに「教育とスキルの不足」があるが、その解消には職業訓練、もしくはインフォーマル教育が必要であり、彼女たちはそれを提供できる可能性がある。モーママさんは小学校、サンティダさんは塾での教育経験があり、今年度の研修生マーチョさんは洋裁を指導できる。ある女の子は「洋裁をしたいけど、算数がわからないのでついていけない」と

語る。洋裁指導も必要であるが、その前に識字教育と計算の指導が必要だ。モーママさん達が寄与できる部分も大きいにあるだろう。つまり今回の課題はPHD研修との親和性が高い、端的に言えば役に立つことができそうだ。

今回見聞きしたスラムでの貧困の連鎖。それらを断ち切り、貧困の再生産を起させないようにする。実現できれば研修事業の大きなアウトカムと言えるのではないだろうか。既にその実現に向け、モーママさん達が動き出している。続報をご期待下さい。

* PCM=「Project Cycle Management : 国際開発プロジェクト手法」



2016 SUMMER PHD STUDY TOUR

スタディツアー参加者レポート

2016年夏のPHDスタディツアーは、ネパールを皮切りにミャンマー、インドネシアの三カ国で開催しました。アジアの今をどのように感じたか、ツアーに参加した皆さんの声を紹介します。

上/ネパール・スタディツアーの様子。村人と共にあぜ道を歩き、飾らない農村の生活を体験。

スタディツアー参加者（敬称略）＝文



「生きる力～ネパール・スタディツアーから～」

高藤 真理

ネパール・スタディツアー参加者
大学講師 左写真右から一人目

たくましく、おらかな村の女性たちの姿に感動した旅であった。生きる力を存分に発揮しているその姿は、眩しくも見え、反面痛々しくも見えた。

特に女性のPHD研修生の思いを想像すると、複雑な気持ちが見えるような気がした。研修生としての責任と現実との折り合い。村の未来のためにと思う彼女たちの考えと私たちの期待は、彼女たち

自身の重責となっているのかもしれない。現実に、カースト制度の名残や、男尊女卑、教育を受ける難しさなど、一筋縄ではいかない問題に取り組んでいる。追い打ちをかけるように、2015年4月に大地震が発生した。彼女たちを取り巻く環境は、厳しさと複雑さを増しているのかもしれない。

日々の生活の中で、「真の豊かさ」

とは何だろうと思うことがある。生々しく生きることでそれが見えてくるのかもしれない。

この旅は、自分が忘れかけていた何かを思い出させてもらった気がする。それが何かは、言葉ではまだ表すことが出来ない。



「ネパール・スタディツアーに参加して」

梅田 蘭

ネパール・スタディツアー参加者
高校生 左写真右から一人目

私は9年間の義務教育を受けて、高校に入学する事が当たり前の環境で生活してきました。でも、ネパールはお金がなくて学校をやめてしまう子、家の仕事が忙しくて学校に通えない子、学校に通っていても水汲みや草刈りなど家の手伝いをしてから学校に来る子、

高い山を1時間以上かけて学校に来る子など様々な子がいました。また、学校も昨年の地震の影響で壁にひびが入ったままの校舎や、学校の校庭に作られた仮設教室で学習していました。

そんな中でも夢に向かって一生懸命学習する姿が印象に残りました。私と

同世代の彼らはみんな夢を持っていて、私が教室の前で自己紹介をしたときの彼らの眼差しは力強いものでした。

私も彼らに負けないように何事にも一生懸命取り組もうと思いました。

「ミャンマー・スタディツアーを通して」

吉村 芙優

ミャンマー・スタディツアー参加者
大学生 右写真右から二人目



私が今回のツアーを通して感じたことは3つあります。それは衛生、教育制度、インフラに関してです。衛生面やインフラについては約1週間過ごし、現地に行って気付いたことが多かったように思いました。特にインフラについては、雨が降った際に道路状況が悪くなり、収穫した農作物を売りに行くにも支障が出ると聞いて、その整備は大きな課題だと分かりました。

今回のスタディツアーを通して、日

本での普段の生活が、いかに便利であり恵まれた環境であるかを痛感しました。しかし、不便なことでも悪いことばかりではなく、電気が無い、物が無いからこそ楽しめることもあったように思います。例えば、私の住んでいる大阪は夜中でも営業している店が多いため、深夜でも道が見えなくなるほど暗くはありません。一方、ツアー先の村では街灯がほとんど無く、陽が落ちて暗くなると道が見えなくなりました。

陽がどんどん傾いて、星が見えたときは感動しました。電飾だらけの私の町ではこんな光景は絶対に見ることはできません。多くのことを吸収することができたので、これからはそれをシェアして、今後の私の研究に役立てたいと思います。



「タベ村再訪」

佐藤 雅美

インドネシア・スタディツアー参加者
元教師 左写真前列右

10年ぶりのタベ村訪問である。「十年一昔」、別の村にきたようだ。道路が舗装され、家々が立派になり、バイクが多く走っている。家の中もトイレがきれいになり、洗濯機などの家財も増えている。かつての日本の村のように利便性や衛生環境が向上している。タベ村も着実に変化してきたわけだ。

今回一番うれしかったのは、『発展』に元PHD研修生たちが大きく関わったということだ。彼らは村をまとめ、行政に働きかけ、生活を向上させた。元研修生が設立に尽力した幼稚園、学校も見せてもらった。子どもたちは生き生きとして楽しそう。PHDの理念がまさにここに生きている。

一方で、山上の村シランジャイの生活に大きな変化はなかった。タベと比べると大

きな隔たりがあるようだ。道はあぜ道のまま、家の中の様子も大きな変化はなかった。地理的に困難な状況があるにしても、何とかならないものかと思う。

『発展』によって、生活費や教育費に金がかかるようになってくる。現金収入には、牛の飼育が最良の手段である

という。サトウキビに隠れるような小屋での飼育は何とも切ない思いがした。

『発展』した生活の先には拝金主義が待っているのかもしれない。健康で文化的な最低限の生活の実現には何をどうすればいいのだろう。旅先でいつもそんなことを考えてしまう。



インドネシア・スタディツアー参加者を歓迎のダンスで迎えてくれるMIS(イスラム)小学校の子どもたち。MIS小学校は元PHD研修生たちの尽力によって設立された。今や政府からも表彰されるほどの学校に成長。MIS小学校の子どもたちは生き生きしていた。

REPORT

インドネシア・西スマトラ州 タランバング地域の保健医療の状況

インドネシアで、長く地域保健人材の育成に関わってきた兵庫県立大学名誉教授 森口育子先生。今回、PHD 協会のインドネシア・スタディツアーに参加、スマトラ島の山間部タランバングの保健医療の状況を報告いただきました。



タランバング保健所を視察中の森口先生（写真右）

インドネシアで30年間、地域保健人材の育成支援を行ってきた。地域住民の健康を守っていくには住民の主体性と身近で活動する保健医療従事者との協働が重要だと考えている。

今回、タランバングの元PHD女性研修生のほとんどが保健ボランティアとして活動していることに興味を持ち、保健医療施設と保健医療従事者の状況も知りたいと考え、保健所、助産所、母子健診（ポシアンドウ）を視察した。

タランバング保健所

タランバングが属する行政県には保健所が18ヶ所あり、うち1ヶ所がタランバングにある。その管内には保健所支所が4ヶ所、助産所が20ヶ所あり、管内人口は18,000人である。医師が2名、看護師12名、助産師27名等が所属しており、所長は看護師が務める。支所や助産所のスタッフと毎週1回会議を行っている。この保健所には入院用ベットが無く、外来患者を迎えている。インドネシアの保健所は診療と保健活動をしているが、受診する外来患者の主な病気は風邪、皮膚疾患、結核で、デング熱やマラリアはほとんどない。貧困者医療保険などを利用した無料受診患者が70%を占める。



血圧を測定する若い医師。タランバング保健所にて。保健所は区役所の隣、町の中心部にある。現建屋のすぐ隣に新しい建屋を建設中である。（2016年9月）

助産所：タラタ・ジャラン

タランバング保健所管内のタラタ・ジャラン村と他1村を管轄する助産所も訪問した。この助産所は住民の要請で半年前に開設され、3年間保健所に勤務した助産師が駐在し、人口874人224世帯、乳児16人、幼児76人、妊婦6人を担当している。この半年間の出産件数は12件、その内10件は助産師が介助を行い、2件は伝統的産婆が行っている。発熱、下痢、皮膚疾患などで患者が1日平均3.4人来る。母子健診は2ヶ所で月1回行っており、健診ごとに保健ボランティアが各5人ずつ活動、うち2名が元PHD研修生である。この助産所は助産師が24時間常勤し、保健統計や地域マッピングもしっかり整備している、住民も信頼しているようである。一方、近隣のタベ村の助産所は、助産師が24時間常勤では無いために夜間は活動しておらず、余り評判が良くないようである。

母子健診：タベバワ

母子健診はタベバワ村で見学した。健診は元研修生が園長を務める幼稚園の施設を活用して実施され、4人の保健ボランティアと助産師（妊婦健診担当）

看護師（予防接種担当）の6人で行われていた。保健ボランティアが準備から受付、体重測定、補助食、記録を担当し、20人位の乳幼児と妊婦が来所した。母親たちは全員母子手帳を持参していた。待ち時間は幼稚園の施設で遊ばせたり、母親同士が話しあっており、子どもが乳幼児期から幼稚園を利用できることは、彼女たちにとって入園の動機づけになっていると思われた。また幼稚園児もこの機会に体重測定をしており、幼稚園にとってもメリットがあると考えられる。

今回の視察を通して、タランバングでは比較的身近に保健医療施設があり、保健サービスが提供されていることを実感した。PHDの研修生達が保健ボランティアとして地域の保健活動に従事することを期待する一方、保健医療関係者が地域に定着することも重要である。今後はタランバング出身の看護師や助産師が出て、この地域の人々の健康向上を推進してほしいと考える。

森口 育子（もりぐち・いくこ）=文
兵庫県立大学名誉教授（国際地域看護学）。PHD協会運営協力委員。静岡県の保健所保健師として勤務。その間に青年海外協力隊保健師として、岩村昇氏が理事のネパール結核予防会で活動。1996年より兵庫県立大学の国際地域看護学教授。在職中はインドネシアを中心に地域看護の国際協力に従事。

PHD 2016 年度研修生レポート

今里 拓哉=文



「保育園で気づいた村との違い」

リンダ・エルニタ インドネシア / 23歳

わたしは日本のほいくえん
でベンギョウしました。日本は
ほいくえんできょうしつありま
す。そこできょうしつをつくる
ひとがごはんとおやつを
つくります。だから子どもたちが
おなじものをたべます。こ
どもたちが好きなものを、き
らいなものもあります。ほいく
えんでせんどうたべます。でも
インドネシアのわたしのむらの
がっこうではおやつをあげる
人がありません。そこでこ
どもたちがおひるごはんと

から、たべます。わたしも
インドネシアにいるときはが
っこうのまえでいろんな「た
まご」をつくりました。でも
日本ではわたしはけんこう
のことをベンギョウしました。
たまごはあつからおい
です。だからたくさんたべると
からだによくないです。こ
だからわたしはインドネシア
へきたらけんこうのことを
おひるのひとにおし
えたいとおもいます。

インドネシアに限らず、東南アジアの多くの国々では、学校敷地内外で駄菓子屋のような売店が存在します。リンダさんのように揚げ物や売物もあれば、工場で作られたスナック菓子や売物などもあります。子どもたちは家の人からお小遣いをもらい、好きなおやつを自分で購入し食べます。場合によっては昼食や朝食までも、自分で購入して食べるようです。

リンダさんは自分が売っていた天ぷらは体に良くないと言いますが、具材が野菜や豆腐なので、まだ良い方なのかもしれません。なかには朝食や昼食をスナック菓子で済ませてしまう子どももたくさんいます。日本での保育研修を通じて、子どもたちの栄養バランスについて考察することができたようです。



左/タラタジャラン村 現地の小学校でおやつを売るリンダさん：2015年9月撮影（右から一人目）
右/養父市太陽保育園での研修の様子



- リンダさん 4月～10月末の研修
- 神戸 YMCA 学院専門学校
(神戸市 / 日本語)
- 滞在: 葛原時寛さん、香織さん
- 西紀南幼稚園 (篠山市 / 教育)
- ささやまこども園 (篠山市 / 保育)
- 滞在: 松本清一さん
- 中野宗嗣さん
(丹波市春日町 / 牛、野菜、有機農業)
- 高木育代さん (神戸市 / 洋裁)
- 太陽保育園 (養父市 / 保育)
- 滞在: 室見千尋さん
- はらつば保育所 (西宮市 / 保育、栄養)
- 加東市保健センター (加東市 / 保健衛生)
- 滞在: 竹中弘子さん、田中美恵子さん
- ステップハウス
(高砂市 / ハンディキャップガイド)
- 滞在: 神吉道子さん、泰彦さん
- 新井遼さん 愛さん*
- * 元国内研修生 本田愛さん
(京都市 / 野菜、有機農業)
- 牛尾武博さん (神崎郡 / 野菜、有機農業)

PH 2016 年度研修生レポート

PH 2016 年度研修生レポート



「学校の保健室で勉強しました」 スリザナ・シャハ・タクリ ネパール / 20歳

日本のからごうにはほけん
しか" あつて べつり ました。
ココでは か"くせい"ちか"
あそんで けか" したる
びよういん いくまゑに おうき
ておて します。けんごう
した"んも します。これは
ひ"ようきの よほ"うに
たゑります。けんごうのため
とて も いいと おもいます。

ネパールの からごうには
ほけん しか" ありません
ネパールの からごうでは
か"くせい"ちか" けか"
すると からごうの せんせいに
かて もらいます。でも
せんせいは じ"ょうず"では
たゑい"です。びよういんには
いきまけん、これはよくたゑい
です。からごうの たゑかに
ほけん しは とて も たゑい
です。

スリザナさんの出身地であるラジャバス村は標高約1700mの山村で、そこには600人の子
どもたちが通う小・中学校があります。しかしスリザナさんが書いたとおり、日本の学校
のような保健室はない上、ラジャバス自体が無医村です。村から医療従事者が常駐するクリ
ニックまでは4時間ほど歩いて山を降りる必要があります。そのクリニックには救急車が
一台ありますが、村に到着するまで1時間。それからクリニックへ搬送されるまで
更に1時間かかります。

無医村だからこそ、病気の予防につながる保健衛生と、怪我した際クリニックに到着する
までの応急手当が重要となります。これら研修を真剣に取り組んだスリザナさんの帰国後の
取り組みが楽しみです。

- スリザナさん 4月~10月末の研修
- 神戸 YMCA 学院専門学校 (神戸市 / 日本語)
- 滞在: 宝田和正さん、てるみさん
- はらつぱ保育所 (西宮市 / 保育)
- 中野宗嗣さん (丹波市春日町 / 牛、野菜、有機農業)
- 寺田まさみさん (豊岡市 / 野菜、加工品)
- 名古屋石田学園星城中学校 (豊明市 / 応急手当、教育)
- しょうぶ苑 (名古屋市 / 介護)
- 滞在: 渡辺観永さん
- 真柴三幸さん (佐用郡 / 完熟たい肥、発酵飼料)
- 丹南健康福祉センター (篠山市 / 保健衛生)
- 滞在: 増岡ショウノバさん
- しぶや助産院 (北九州市 / 助産)
- ステップハウス (高砂市 / ハンディキャップガイド)
- 滞在: 神吉道子さん、泰彦さん
- 泉精一さん (松江市 / 土着微生物、野菜、養鶏)
- 滞在: 岡田義之さん



「デイサービスに通って気づいたこと」 ティダチョー (マーチョ) ミャンマー / 24歳

にほんは しょうがいをもっている
ひたたちのための デイサービスか
た"さんある りか おたしは ひろく
ました。あたしが べんき"るした
ステップハウスは とても いい
とおもいます。からだと
こころ けんき"し たります。
たてまは" できる に"て
を する"と あしは たんた"ん
けんき"に たります。こころ
も うたしいです。あたしの
あたしには ステップハウス
は たいへん しょうがい"しは

す"と いまの たゑに
います。これは けんごう に
あまりよくない と おもいます。
しょうがいをもっている ひた
たちも あたしたち と いっしょ
できる じ"ご"いろいろあります。
あたしたちも じ"ご"ある"と
うたしいです。しょうがい"もつて
いる ひたたちも とても
うたしいです。たんご"も きもち
か" おたしいです。

14歳の頃、突然に体の自由が利かなくなったマーチョさん。家で寝た切りとなってしまう、
とても寂しい思いをしたそうです。1カ月ほどして少しずつ体の機能は回復しましたが、今度
は家から出るのが怖くなってしまいました。しかしそんなマーチョさんに対して、お母さん
は厳しい態度を取りました。まだ一人で歩くこともままならない中、学校に行くよう強いたそ
うです。恐る恐る登校した学校で待っていたのは、マーチョさんを心配してくれていた友達
たち。まだ不自由な彼女がどこ行くにも、常に支えてくれたそうです。そして翌日からは自ら
の意思で通学したそうです。

自らの実体験とデイサービスでお世話になった皆さんとの交流を通じて、障がいを持つ方々
をはじめ、社会の誰しもが皆同様に、心身共に元気であるために出来る事について考えました。

- マーチョさん 4月~10月末の研修
- 神戸 YMCA 学院専門学校 (神戸市 / 日本語)
- 滞在: 黒野美代子さん
- のぞみ保育園 (神戸市 / 保育)
- 赤坂真砂さん (神戸市 / 洋裁)
- 寺田まさみさん (豊岡市 / 野菜、加工品)
- 友愛幼児園 (神戸市 / 保育)
- ステップハウス (高砂市 / ハンディキャップガイド)
- 滞在: 神吉道子さん、泰彦さん
- 真柴三幸さん (佐用郡 / 完熟たい肥、発酵飼料)
- 水谷恵子さん (高山市 / 応急手当、医院、洋裁)
- 滞在: 石原辰雄さん
- こうべ小学校 (神戸市 / 教育)
- 松江市健康福祉部保健センター (松江市 / 保健衛生)
- 滞在: 佐藤玲子さん、犬山シゲ子さん、
浜村愛子さん、中尾千代子さん、
米田祝子さん
佐倉真喜子さん (隠岐郡 / 保健、保育、洋裁)



左 / スリザナさんの通ったラジャバス村の学校
右 / 名古屋にある星城中学校での応急手当の研修の様子



左 / 高砂市ステップハウスでの研修の様子
右 / ステップハウスの皆さんと記念撮影



ネパール大地震復興状況の報告

800万人以上の被災者を出したとされる2015年のネパール大地震。
2016年7月27日～8月5日のネパール・スタディツアーにて、現在取り組んでいる復興支援プロジェクトのモニタリングを行いました。現地
の状況と合わせてご報告をさせていただきます。



上 / ヤギ飼育プロジェクトでヤギの提供を受けることになったビナ・タマンさん / ガハテ村

上石 景子=文

マンガルタル地域 小学校建設

地震により教室が使えなくなったため、仮設の教室で勉強をしている子どもたちが多くいます。PHD 協会では当会会員の前田生子さんの想いをご支援を受け、カウンターパートナーである SAGUN と協働し、マンガルタルの小学校再建に着手しています。年内には耐震構造を備えた校舎が完成する予定です。

仮設住宅建設支援

昨年2月に完成した、マンガルタルの250世帯の仮設住宅。今回のツアーでは、仮設住宅の様子やそこで暮らす人々の暮らしぶりを視察してきました。

仮設住宅はトタンの屋根とブルーシートで作られており、雨洩りや強い風で家屋が揺れる、蒸し暑く暗い、蚊

などの虫がたくさん入ってくるなど多くの問題があります。仮設では暮らしにくいのが、本来の自宅はいつ崩れるかわからないため、昼は自宅で過ごし、夜は仮設で寝るという生活をされている方が多いようでした。

ネパール政府主導の新住宅建設計画はなかなか進んでいません。政府は日本円にして約20万円ほどを各世帯に住宅再建資金として提供する予定です。しかし、地震から1年半近くが経過している現在でもその資金援助開始がいつになるかわかっていません。再建の目的がたたないため、仮設で暮らさざるを得ない状況です。

ピンタリ村農業組合支援

今回のツアーに参加されたコープこうべ組合理事である竹内由美さんに、ピンタリ村農業組合の方々へ、エコ

ファームの仕組みについてレクチャーをしていただきました。レクチャーでは組合が農家と契約して農家を守るシステム、農薬の危険性、地産地消、旬の食材を摂る大切さ、人の健康にも環境にも優しい持続的な組合のあり方などが説明されました。組合の方々のエコファームへの関心は高く、竹内さんとの間で活発な質疑応答が交わされました。今後、本格的に復興活動を進めていく上で、農業や食の安全は生活再建の要となる重要な部分になっていくだろうと思います。

マハデブスタン地域 命の水プロジェクト

震災により地盤が変化した影響で、ガハテ村では湧き水が枯れて水不足に陥っていました。そこで「命の水プロジェクト」が始動しました。村の水源



左上 / 屋外の臨時教室
左下 / ヤギ肥育プログラム参加希望者へのインタビュー
右上 / ピンタリ村のトタン製仮設住宅
右下 / 命の水プロジェクト 水源近くの貯水タンク

を重機で整備、水源からの水を一旦貯水タンクに溜めます。貯めた水は揚水ポンプで近くの山頂にあるタンクへ送り、そこから村の水道経路で合計90世帯に配水する計画です。

今回のツアーでは、現地カウンターパートナーのNGOであるSSSより「命の水プロジェクト」完了の報告がありました。このプロジェクトには女性グループの積極的な参加と貢献も大きいとの話がありました。プロジェクトにおいて中心的な役割を担っていた元研修生パッサンさん(11年度)は、「プロジェクトは完了しましたが、まだまだたくさんやる必要があります。これから村の人たちとお金のこと、メンテナンスのこと、みんなで話し合います」と語っていました。

ヤギ肥育プログラム

「PHD 協会では、ガハテ村とクワパニ村の4つの女性グループにヤギを提供することを決定しました。そのヤギを女性たちが自分で育てて売り、収入創出につなげてもらうというプログラムを実施していく予定です。ネパールの農村部では水牛やヤギ、鶏などを財産として飼い、現金が必要な時に売るのが一般的ですが、ヤギは水牛ほど手間がかからず散歩も簡単で、かつ高く売れるということで注目されています。

今回のツアーでは、SSSとともにヤギ肥育のトレーニングや各女性グループへのヤギの配分などについて話し合いました。また、ガハテ村の女性グループとミーティングを持ち、プログラムに参加したい人を募りました。ヤギの提供を受けることになったビナ・タマンさんは、「プログラムにより得た収入

は子どもの教育や家計を助けるために使いたい」と話していました。

もともとネパールにある潜在的な問題(カースト差別や政府の官僚的体制、男女格差など)が大地震という非常事態と絡み合い、問題を複雑にし、そして根深くしています。地震の復興支援とともに、根本的な社会問題の解決につながるような息の長い支援の必要性を改めて感じました。

一方で、そんな状況にも前向きに立ち向かう研修生や村の人々の生命力の強さは印象的でした。「復興はなかなか進まないが、人々の精神面での変化が大きい」との声もあり、地震直後には絶望や諦めといった気持ちを抱いていたネパールの人々が今、着実に生活再建を進めています。



故 大森 昌也 氏

「農こそが苦難にくじけない生きる力を育てる場」

2016年3月24日、大森昌也さんがお亡くなりになりました。多くの研修生をはじめ、職員や当会関係者がお世話になってきました。私も国内研修生時代に1週間ほど、大森さんのご自宅に泊めていただき、炭や木酢液に関する講習を受けた思い出があります。本稿では大森さんを偲んで百姓仲間の寺田さんの追悼文を掲載いたします。この文章は4月9日に行われた大森さんのお別れ会で捧げられたものです。桜が満開の中、みんなで「インターナショナル」を歌い、お酒を飲んで大森さんを楽しく偲ぶ時を持ちました。大森さんが笑って見守ってくれたような気がします。謹んでご冥福をお祈りします。

坂西 卓郎

大森昌也さま

近年まれにみる暖冬の但馬でした。雪に閉ざされることもなく、「こんなに足元の広い冬もなかったな」と思い返します。そんな暖冬のせいあってか、毎年のように春を待ちわびる湧き上がるような喜びと期待を持ってないままでした先月3月24日早朝、昌也さんが逝かれた知らせを受けました。透き通った冷たい空気、空の高い朝でした。外へでてみると、ペアのシラサギとペアのコウノトリが偶然、くるくると舞いながら北の方へ風によってゆきました。神様の使いでしたか。

思い返せば一年前のその日は、ここあーすで、長女のちえの結婚披露宴で仲間たちでお祝いに集まった日でした。僕にとっては昌也さんと一緒にお酒を飲んだ最後になりました。

子どもや孫たちに囲まれたあたたかな空気のなか、目を細めほころぶ笑顔。

「てらちゃん、お父さんにお酒たくさん飲まさないでよ」と二女のあいの叫び声。

「・・・まったくもお、なあ寺田さん、ほおほおっ」と、上機嫌な時の昌也さんの口癖が今でも聞こえてきます。

昌也さんが但馬に移住され過ごした時間は、僕が百姓としてすごした時間と同じく30年あまりを数えます。百姓仲間としていろいろな場面で助け合ってきました。

昌也さんと夫婦とケンタ、げん、ゆきと三人の幼い子どもをつれ、ここ下戸の村へ

移住。空き家を手に入れて自ら直して住まいとし、田畑を借りて自給のお米や野菜を育て、煉瓦のパン窯である到底記憶から消える事がないであろう玄米パンを焼き、ヤギ・鶏を飼い、豚を育て、炭を焼き、バイオガス、水力発電などなど・・・そのなかで生まれたちえ、あい、れいの三人娘。また子ども達が移住した事を機に分校が再開され、過疎の山村に希望の灯りをともしました。

(中略)

「農こそが苦難にくじけない生きる力を育てる場」と言う昌也さんの想いの種は、芽を出し花を咲かせ、実を結び、確かに繋がってゆきました。今は子守の時を終え、元気に巣立った子どもたちの明日の幸せを祈りつつみつめてゆく時と思うのです。

思えば本当に急なことでした。昌也さんの体調が良くないと知ったのは、田植えや畑の事に忙殺され、ほっとひと息ついた昨年6月の終わりでしたか。ひと月あとにお見舞いに来た時にはすでに、手術前の抗がん治療を受けられた後で、ぐったりとされた姿が想像できず信じられませんでした。

そんな心配も術後の驚くほどの元気な姿で吹っ飛び、こちらが勇気をもらうほどでした。10月にはあーすの稲刈りも終えられ、その後回復を只々祈りつつ春を迎えました。

昌也さんが逝かれてからほどなく、こち

らではコブシをはじめソメイヨシノ、ツツジと一気に咲き揃っています。今年も春が来ました。

「生者必滅会者定離」。消えゆく熱き命と、芽吹いてゆく新しき命。大なる自然摂理の無常を想います。

昌也さんからは人生の先輩として百姓仲間として、大きな学びをいただきました。お出会えできたこと百姓として語り合えたことに感謝しつつ、ここにご冥福をお祈りします。

大樹の元、お母様と一緒に安らかにお眠り下さい。そして残された私たちの明日を見守って下さい。

昌也さん、お疲れ様でした。

さようなら

2016年4月9日
百姓仲間 寺田まさふみ

※お別れ会の日の様子。大森さんが作り上げてきたあーす農場に集う。

3週間のインドネシア・スマトラ 日本語教師体験

国内研修生の大倉梨花が MIS (イスラム) 小学校で日本語教師を体験しました。

大倉 梨花=文

2016年9月19日から3週間、インドネシアの MIS タベ小学校で、日本語と英会話を教えてきました。月曜日から土曜日まで、1年生から6年生の授業を毎日2コマ担当しました。日本語の授業では、挨拶からはじまり、簡単な自己紹介の練習(名前や年齢)数、曜日、色、果物の名前などを一緒に勉強しました。言葉の勉強だけでなく退屈になるので、時々折り紙で動物やお菓子などを作って遊びました。生徒たちはいつも明るく勉強熱心で、日本に関心を

持ってくれていたのが毎日楽しかったです。

タベ村は小さいコミュニティで、人々の繋がりがとても強いです。集団や家族をととても大切にします。日本から来た私にも村の人たちはとても優しくかったです。帰国時にはサプライズで心のこもった手紙とプレゼントをもらいました。

また、タベ村に滞在して、イスラム教に対する考えが変わりました。これまではメディアの影響で、ネガティブなイメージを持っていましたが、実際にタベ村の人々と

触れ合ううちに、それが間違いであったことに気づいたのです。村の人々にとって、教えを信じ、祈り、勉強することは自分自身と向き合う時間であり、平和のために祈る時間でした。この気持ちはどの宗教でも同じで、とても素晴らしい事です。自分の目で確かめることの大切さを学ぶことができたと思います。MISの先生や研修生、村の皆さんには大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

タベ村での一日の予定(月曜日から土曜日)

7:00	起床、朝食 8時に学校へ(下宿から徒歩3分)
9:00-10:10	授業
10:30-11:00	休憩(お茶やおしゃべり)
11:00-12:10	授業
12:10	下宿に戻って昼食
13:00-19:00	授業の準備、インドネシア語勉強、散歩や買い物など。
19:00	夕食



大倉梨花(左から3人目)とMIS小学校の生徒たち

日々是 東奔西走

研修担当
今里拓哉『気づきが生み出す
行動への力』「村に戻ったら
小さな図書館を作りたい」

これがサンティダさん(15年度)が昨年度の帰国報告会で発表してくれた、村に戻ってから実施したい計画でした。きっかけは日本での保育園や小学校で行った研修。幼い子どもたちが本に親しんでいる様子を見て彼女は驚いたそうです。彼女の村では子どもだけでなく、大人も本をあまり読みません。でもミャンマーの村の子どもたちも、機会さえあれば本が好きになり、本に親しむのかもしれない。サンティダさんの中に小さな「気づき」が生まれました。

あれから約5か月後。夏のスタディツアーの際にサンティダさんの家を訪れたら、ありました。とても小さな図書館ですが、棚を作り、分類され、貸し借りも行われ、看板も作られてありました。中にはミャンマー語訳が書き足された日本からの絵本もありました。

「PHDの国際協力の形」

「子どもは本が好きだから、図書館を作るといいですよ」と誰かに言われたところで、「そうか、わかった。では頑張ります」と言って取り組む人はどれくらいいるでしょうか?サンティダさんは日本での研修中に、自ら「子どもたちは本が好きなんだ」と内発的に気づきました。自ら気づいたことだからこそ、行動への力が生まれ、わずか5カ月で小さな図書館を形にするに至ったのではないのでしょうか。

意図的に「気づきを与える事」は、なかなか難しく、容易ではありません。PHDにできることと言えば「気づきの機会」となる研修の提供と、それを整理するふりかえり。でもこれが、「内発的な気づき」につながり、村の人たちによる村作りを促すPHD流の国際協力の形なのだと、あらためて感じる事ができました。



ミャンマー語訳付の日本の絵本



上/ タランバングで飼育されている牛。イドゥラドゥハでは、こうした牛が神に捧げられる。
右/ 2016年9月12日 イドゥラドゥハの朝、地域の人々がほぼ総出で広場に集まり、神へ祈る。(前列が男性、後列が女性)



Iduladha

イドゥラドゥハ (犠牲祭)
肉を食べるといこと

八木 純二=文

今年のインドネシア・スタディツアー2日目の9月12日は、イスラムの祭り、イドゥラドゥハ(犠牲祭)だった。

その日の朝早く、地域の人々総出で神への祈りが捧げられた後、午後7頭の牛が川辺で生贄として屠られる。老若男女問わず多くの村人が、この生贄の見物に行くらしく、私も見学に行くことにした。

私が川辺に着いた時、既に儀式は始まっていた。牛が血だまりに伏して、呻いている。なかなか死なない牛を村人が押さえつけ、首から血をしぼり出している。畑に転

がる首のない体。大きな胃には食べていた草がまだ入っており、強い臭いを発している。日本人の私には強烈な光景だが、村人には慣れたものだ。彼らは先ほどまで生きていた牛を手際よく肉にしている。そして、その肉は村人に平等に分けられる。

日本では肉を食べるとい行為の過程を隠し、その本質を見えなくしている。イドゥラドゥハはそれが何かを教えてください。

バランスのジェンダー観

目に見えるもの、見えないもの、女性の地位を巡る思考様式について、ネパールで少し考えてみました。

上石 景子=文

今回のネパールツアーでは、ガハテ村とクワパニ村の女性グループをサポートする「ヤギ肥育プログラム」について、ミーティングや被支援予定者のインタビューをしてきました。女性の収入創出による地位向上は、ランマヤさん(2012年研修生)をはじめネパールの女性たち自身が求めていることであり、わたしも実際に女性グループとのミーティングに参加してみて、改めてプログラムの重要性を感じました。

ネパールにおける男尊女卑の問題についてはツアー中、何度も話題にのぼり、なぜそもそも女性たちは現金収入を得ないと地位を向上させることができないのか、考

えさせられました。彼女たちは家事や育児を通して子どもや家族や周りの人々に対し、愛情や癒し、安心感、エネルギー、居場所といった、目には見えないけれど大切なものを生み出し与え続けている、既に十分な存在なのこと。おそらく、そういった彼女たちの働きは数字や地位に変換されることがないために、男性原理の強すぎる近代的思考様式* お金、肩書き、順位といった、目に見えてわかりやすいものを価値基準とする考え方の枠組みの中では評価されにくいのだろうとわたしは思います。経済的に苦しい地域であれば、その傾向は一層強まるのかもしれない。

* エコロジカル・フェミニズムの中では、近代化の過程で理性や合理性(男性原理)が重視されるようになり、その中で人間の本来持っている自然性や身体性(女性原理)が否定されてきたこと、そして男性原理と女性原理の均衡が崩れたことによって、女性だけではなく男性をも苦しめられていることが指摘されています。

物質的・経済的な支援は、第一段階としてとても重要なプロセスです。一方で、村の人々の内面性の変化や啓発を促す長期的な取り組みも必要とされるのではないのでしょうか。



ガハテ村女性グループのミーティング

PHD 活動紹介 2016年7月~10月

7月

- 2日 さんがいちほらの七夕祭り講演:NGO相談員(坂西)
- 6日 篠山ロータリークラブ例会(上石・リンダ)
- 6日 関西NGO協議会理事会(坂西)
- 8日 川西ロータリークラブ例会(上石・マーチョ)
- 8日 ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth 運営委員会(坂西)
- 9日 Let's Cook Together:第1回 フィリピン(ジェン・大倉)
- 9日 ソディ例会(上石)
- 10日 米山奨学セミナーおよび交流会(上石)
- 10日 関西NGO助成プログラム プレゼンテーション(坂西)
- 13日 ESD推進ネットひょうご 清野様来訪(坂西・八木)
- 16日 ネパールツアー事前説明会(坂西・上石)
- 18日 こうべ小学校 訪問(坂西・今里)
- 20日 在関西NGOとJICAとの意見交換会(坂西)
- 21日 JICAセミナー会議(坂西)
- 21日 多文化共生のための開発教育セミナー会議(上石)
- 23日 生活協同組合こうべ 平和の集い(上石・大倉・加藤)
- 27-8/5日 ネパールスタディーツアー(坂西・上石)
- 27日 小野加東ロータリークラブ例会(今里・スリザナ)
- 27日 篠山ロータリークラブ 納涼例会(八木・リンダ・スリザナ)
- 30日 加東市連合婦人会・交流会(今里・大倉・加藤・スリザナ・リンダ・マーチョ)



加東市連合婦人会の皆さんと記念撮影

8月

- 3日 NGO相談員近畿ブロック会議(中西)
- 8-9日 多文化共生のための国際理解・開発教育セミナー(坂西・上石)
- 13日 Let's Cook Together :第2回 ミャンマー(ジェン・大倉・マーチョ)
- 15-16日 PHD協会夏季休暇
- 17日 小野加東ロータリークラブ例会(上石・スリザナ)
- 17日 松原高校インターアクトクラブ来訪(坂西)
- 18日 大阪YMCA・HIS小林学科長来訪(坂西・八木)
- 18日 田村税理士事務所訪問(坂西・上石)
- 18日 関西NGO大学運営委員会(坂西)
- 19日 NGO-JICA協議会 コーディネーター会議(坂西)
- 20日 川西ロータリークラブ例会(今里・マーチョ・リンダ)
- 20-21日 小野まつり(上石・スリザナ)
- 22-31日 ミャンマースタディーツアー(坂西・今里)
- 27日 ソディ例会(上石)
- 28日 姫松教会講演(上石)
- 31日 篠山ロータリークラブ例会(上石・リンダ)



神戸常盤大学にて口腔衛生研修の様相

10月

- 1日 PHD協会ネパール大地震救援活動報告会
- 1-2日 グローバルフェスタ:NGO相談員(上石)
- 3日 JANIC アカウンタビリティセルフチェック実施(坂西・古寺・上石)
- 4日 NGO相談員 近畿ブロック会議(坂西)
- 5日 篠山ロータリークラブ例会 卓話(上石・リンダ)
- 6日 神戸常盤短期大学 交流会(今里・加藤・スリザナ・リンダ・マーチョ)
- 7日 川西ロータリークラブ例会 卓話(上石・マーチョ)
- 7日 大阪女学院大学にてタイツアー説明会(坂西)
- 7日 ワン・ワールド・フェスティバルfor Youth 運営委員会(坂西)
- 8日 神戸市シルバーカレッジ 学園祭バザー(八木・加藤・スリザナ・リンダ・マーチョ)
- 11日 ネパール大地震復興支援チームひょうご被災地調査・支援報告会(坂西)
- 11日 松山市立中島中学校 交流会:NGO相談員(今里・八木・スリザナ・リンダ・マーチョ)
- 13日 アーユス組織強化ワークショップ 東京(坂西)
- 13日 赤穂ロータリークラブ例会 卓話(上石・マーチョ)
- 15日 JICA青年海外協力隊募集説明会 奈良:NGO相談員(坂西)
- 15日 JICA青年海外協力隊募集説明会 JICA関西:NGO相談員(上石)
- 17日 コープこうべ 訪問(坂西・八木)
- 19日 NPO・NGO合同就職説明会ワーキンググループ(坂西)
- 20日 西宮今津高等学校生徒 来訪(今里・スリザナ・リンダ・マーチョ)
- 21日 PHD協会財務委員会(坂西・上石)
- 24日 JICA関西訪問(坂西)
- 25日 兵庫県税額控除検討会(坂西)
- 26日 小野加東ロータリークラブ例会 卓話(上石・スリザナ)
- 26日 高砂青松ロータリークラブ例会 卓話(坂西・リンダ)
- 27日 神戸常盤短期大学 交流会(今里・スリザナ・リンダ・マーチョ)
- 28日 自動車総連愛のキャンパ贈呈式(坂西・スリザナ)
- 31日 阿弥陀小学校 交流会(今里・スリザナ・リンダ・マーチョ)

PHD News

◆ 連合、自動車総連の皆様へ感謝!

今年も日本労働組合総連合会様から「連合・愛のカンパ」と全日本自動車産業労働組合様から「福祉カンパ特別寄贈」をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

10月末には自動車総連本部事務所にて贈呈式があり、スリザナさんと出席させていただきました。組合員の皆様へ暖かく迎えていただきました。



「福祉カンパ特別寄贈」贈呈式の模様

(自動車総連本部事務所にて)

◆ 研修担当職員1名募集

2017年度より、研修担当として勤務できる職員を募集します。詳細はHPをご覧ください。2017年1月には募集説明会を実施する予定です。関心のある方、ぜひご参加ください。

◆ 2017年度国内研修生募集

アジア・南太平洋地域からやってきた研修生とともに学びませんか?国際協力に興味がある人、世界や日本の課題が気になる人、NGOや国際機関で働いてみたい人、是非一度お問い合わせください。

2017年度研修生のホストファミリー募集!

期間：2017年4月中旬～2018年3月中旬の約1年間。来日後の日本語研修中(6週間)は毎日、現場研修開始以降は、月平均1週間～10日程度。12月～3月は、研修内容により月20日程度となります。

経費：当会規定の食費、滞在費をお支払いいたします。その他、交通費、医療費などは基本的に当会が負担します。

応募条件：当会事務所から公共交通機関で1時間以内で通える範囲のご家庭。
*詳しくは、お問い合わせください。



トゥッサさん
男性 36歳
ネパール



デフィさん
女性 27歳
インドネシア



タンタンミーさん
女性 19歳
ミャンマー

第34回 タイ山岳民族カレン・スタディツアー

カレン民族草木染の生産者と交流、村生活を体験できるお得なツアーです!

日程：2017年2月19日午前 関西空港集合 ～3月1日早朝 関西空港着

参加費：175,000円 定員：5名

訪れるのは、タイ北部に位置するチェンマイ県とメーホンソン県にあるカレンの人たちが暮らす村。

PHD協会がフェアトレード商品として扱う「カレンの布」を織り手グループから購入します。メンバーが工夫を凝らして作った手織り布製品に直に触れてください。染めや織りも見学・体験できます。



参加者募集中!!

ショックだったこと

○月×日のPHD協会

職員 今里 ショックなことが思い浮かばないことがショック。心が枯れているから、感じないのか。研修生から「じいちゃん」と呼ばれる所以?

職員 上石 ネパール出張で日焼け対策を怠りシミが。人生初!今までは大丈夫だったのに。26歳、もう私の肌は紫外線を跳ね返してくれないみたい。。

職員 坂西 「ボス英語上手じゃないね」とサンティダさんから一言。英語を勉強し始めたそうで「今は下手なのがわかる」とハッサリ。遠慮ないなあ。

職員 八木 夜、自転車で帰宅途中、白目でブリッジする謎の女性に遭遇。お化け?しかし怪奇現象を易々とは信じない今年本厄の41歳、八木。お祓いは済。

以上、秋にちなんで運動しない順

2016年度 帰国報告会のご案内

下記のとおり2016年度研修生たちの帰国報告会を行う予定です。1年の学びや、村に戻ってからの活動計画などを発表させていただきます。お誘いあわせの上、ご参加ください。

日時： 2017年3月4日(土)

13:30～16:30

場所： 兵庫県民会館10階 福の間
神戸市中央区下山手通4-16-3

Tel: 078-321-2131

資料代：500円

編集協力：桃骨

PHD運動とは1962年よりネパール、東南アジアを中心に医療活動に従事した岩村昇医師の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをさげ、平和(Peace)と健康(Health)を担う人づくり(Human Development)をすすめ、共に生きる社会をめざし、1981年からはじまりました。

発行：公益財団法人PHD協会
住所：〒650-0003 神戸市中央区
山本通4丁目2-12 山手タワーズ601
電話：078-414-7750
FAX: 078-414-7611
E-mail: info@phd-kobe.org
URL: http://www.phd-kobe.org
郵便振替口座：公益財団法人PHD協会 01110-6-29688